

若王寺遺跡

—福吉地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査—



平成12年度に発掘調査した若王寺遺跡の空中撮影写真

2004年3月

岡山県
勝央町教育委員会

若王寺遺跡

— 福吉地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査 —



平成12年度に発掘調査した若王寺遺跡の空中撮影写真

2004年3月

岡 山 県
勝央町教育委員会

序

岡山県勝央町は、町の中心部を南北に滝川が流れ、なだらかな丘陵地帯です。古来より人々が住みはじめ、町内には800箇所にも及ぶ遺跡が存在し、現在まで豊かな文化を育んできました。

このたび勝央町の西南部の福吉地区において圃場整備の計画が策定されました。計画では、約10ヘクタールの広大な土地を改良することから、予定地内に存在する遺跡への影響が憂慮され、その保護・保存について原因者側と協議を重ねてまいりました。遺跡の大部分は工事の設計変更により保存されましたが、やむを得ず遺跡を損壊する箇所については記録保存の処置をとることとなりました。若王寺遺跡では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落の一部が発見されました。この時代の集落は町内においては初めての調査事例で、本町の歴史を知るために重要な成果があげられました。こうした調査の成果は現代を生きるわれわれに何らかの形での示唆を与えてくれるものであると思われます。

この報告書が勝央町の歴史を理解するための一助となり、また広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高める上で役立てば幸いです。

調査にあたっては、多岐に渡りまして様々にご尽力をいただきました地元の方々、および発掘調査に参加していただいた方々をはじめ、各方面からのご支援、ご協力を頂きました。心より御礼申し上げます。

平成16年3月29日

勝央町教育委員会

教育長 岸 本 耕 二

例　　言

1. 本書は、岡山県勝田郡勝央町福吉地内に所在する若王寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、福吉地区土地改良事業に伴うもので、勝央町の委託を受けて、勝央町教育委員会が平成11年度に試掘調査、平成12年度に発掘調査、平成15年度に報告書作成作業を実施したものである。
3. 若王寺遺跡は、岡山県勝田郡勝央町福吉字若王寺に所在する。
4. 発掘調査は、確認調査、全面調査の2次にわたって行い、全面調査は、平成12年6月12日～8月10日および平成12年10月17日～12月8日の期間に行なった。
5. 調査および報告書作成は勝央町教育委員会社会教育課が行い、調査および本書の執筆編集は勝央町教育委員会社会教育課　團　正雄が担当した。
6. 本報告にかかる遺物・写真・図面は勝央町教育委員会で保管している。
7. 本書の作成にあたり、現地調査および整理作業時に関係各機関をはじめ、多くの方々に有益なご教示、ご指導を賜ったことに感謝の意を表します。
8. 発掘調査に際して以下の方々のご協力を頂きました。記して感謝の意を表します。

(敬称略、順不同)

大谷楨彦 大谷治世 大谷正子 大谷小蝶 大谷よね子 笠尾 明 宮能秀和 中島敬剛
小林るり 下山省吾 末吉博美 橋本泰功 高田 博 田中元江 竹久直樹 橋本清美
橋本伸治 前田 恵 上原保雄 竹久啓一

凡　　例

1. 本書に示す標高値は東京湾標準潮位（T.P.）を基とし、方位は真北を指す。
2. 本書第2図に使用した地形図は国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「津山東部」「真加部」を複製したものである。
3. 本書に掲載した遺構は、掘立柱建物、土壙などの種別ごとに通し番号を付けている。
4. 本書における遺構および遺物実測図の縮尺については明記しているが、主なものは以下のとおりである。

遺構：掘立柱建物（1/80） 土壙（1/30） 溝断面（1/40） 遺物：土器（1/3）

5. 本報告における遺構の土色名は新版標準土色帳（1998年版）（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修）によっている。

本文目次

序

例言・凡例

目次

第1章 地理的歴史的環境.....	1
第2章 発掘調査の経緯と経過.....	3
第1節 調査にいたる経緯.....	3
第2節 確認調査・発掘調査の経緯と概要.....	4
第3節 発掘調査の体制.....	4
第3章 確認調査の概要.....	5
第1節 荒神谷地区的概要.....	5
第2節 若王寺地区的概要.....	6
第3節 試掘調査のまとめ.....	8
第4章 本発掘調査の概要.....	9
第1節 遺跡の立地と調査の概要.....	9
第2節 A区の遺構・遺物.....	10
1. 調査区の概要.....	10
2. 遺構の概要.....	10
第3節 B区の遺構・遺物.....	20
1. 調査区の概要.....	20
2. 遺構の概要.....	20
第4節 C区の遺構・遺物.....	24
1. 調査区の概要.....	24
2. 遺構の概要.....	25
第5章 まとめ.....	30

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図.....	1	第23図 溝6～9断面図(1/40).....	18
第2図 周辺の遺跡分布図(1/40000).....	2	第24図 溝10(1/30)・断面図(1/30)出土遺物(1/3).....	18
第3図 地域整備計画範囲図(1/10000).....	3	第25図 A区その他の出土遺物(1/3).....	19
第4図 試掘トレーンチ配置図(1/5000).....	5	第26図 B区西壁断面図(1/60).....	20
第5図 荒神谷地区トレーンチ平面・断面図(1/80).....	6	第27図 B区遺構配置図(1/200).....	21
第6図 若王寺地区トレーンチ平面・断面図(1/80).....	7	第28図 住居1(1/80).....	22
第7図 調査区(1/2000).....	9	第29図 掘立柱建物8(1/80).....	22
第8図 A区東壁断面図(1/60).....	10	第30図 土壙3・溝11(1/80)・断面図(1/40)・ 溝11出土遺物(1/3).....	22
第9図 A区遺構配置図(1/200).....	11		
第10図 掘立柱建物1(1/80).....	12	第31図 溝12～14(1/80)・断面図(1/40)・ 溝12・13出土遺物(1/3).....	23
第11図 掘立柱建物2(1/80).....	13	第32図 B区素掘溝群断面図(1/40).....	23
第12図 掘立柱建物3(1/80).....	13	第33図 B区その他の出土遺物(1/3).....	24
第13図 掘立柱建物4(1/80).....	13	第34図 C区西壁断面図(1/60).....	24
第14図 掘立柱建物5(1/80).....	14	第35図 C区遺構配置図(1/200).....	25
第15図 掘立柱建物6(1/80).....	14	第36図 掘立柱建物9(1/80).....	26
第16図 掘立柱建物7(1/80).....	14	第37図 柱穴列(1/80).....	26
第17図 構1(1/200).....	14	第38図 溝15～17断面図(1/40)・溝16出土遺物(1/3).....	26
第18図 土壙1(1/30).....	15	第39図 溝18断面図(1/40)・出土遺物(1/3).....	27
第19図 土壙2(1/30).....	15	第40図 溝19断面図(1/40)・出土遺物(1/3).....	27
第20図 不明遺構(1/80)・出土遺物(1/3).....	16	第41図 C2区段状遺構・平坦面断面図(1/60).....	28
第21図 溝1～3断面図(1/40)・溝2出土遺物(1/3).....	17	第42図 C区その他の出土遺物(1/3).....	29
第22図 溝4・溝5断面図(1/40).....	17		

図 版 目 次

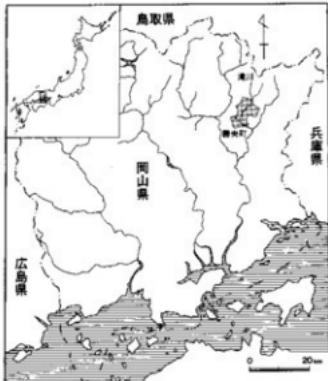
カラー図版 福吉地区全景(東上空から)	国版5	住居1(北から)
若王寺遺跡全景(西上空から)		掘立柱建物8(南から)
国版1 A区全景(北から)		溝11・土壙3(西から)
掘立柱建物1(北から)	国版6	溝12～14(東から)
掘立柱建物2(南から)		素掘り溝群(西から)
国版2 掘立柱建物3(南から)		C区全景(北から)
掘立柱建物4(西から)	国版7	掘立柱建物9(東から)
掘立柱建物5(西から)		柱穴列(南から)
国版3 掘立柱建物7(西から)		溝15～16(東から)
不明遺構(西から)	国版8	平坦面・溝17、18(東から)
溝1～3(東から)		溝19(北から)
国版4 溝4～5(北から)		現地説明会風景
溝10(南から)	国版9	A区出土遺物
B区全景(北から)		B区出土遺物
		C区出土遺物

第1章 地理的・歴史的環境

勝央町は南方に緩やかに傾斜する標高100m～200mの丘陵台地で、北部は、那岐山、滝山などの中国山地を背に受けて奈義町の日本原高原から緩やかな丘陵が起伏した台地を形成し、中南部は、滝山に源を発し町の中心を南北に流れ吉井川に注ぐ滝川に沿って比較的平坦な盆地・平野を形成している。勝央町内には現在までに、約800箇所の遺跡が確認され、県下でも有数の埋蔵文化財包蔵地帯となっている。

今回調査を実施した若王寺遺跡のある福吉地区は、町の南西部に位置し、西の津山市に接している。付近は勝間田平野のある滝川流域とは違い、津山市の加茂川から派生する広戸川に注ぐ小河川の肘川の流域になっている。平野は小さいものなだらかな丘陵に囲まれておらず、散布地、古墳が点在している。この地域のみの歴史を詳述することは難しいため、以下では、町全体の歴史を概観しながら福吉地区周辺の遺跡についても触れておきたい。

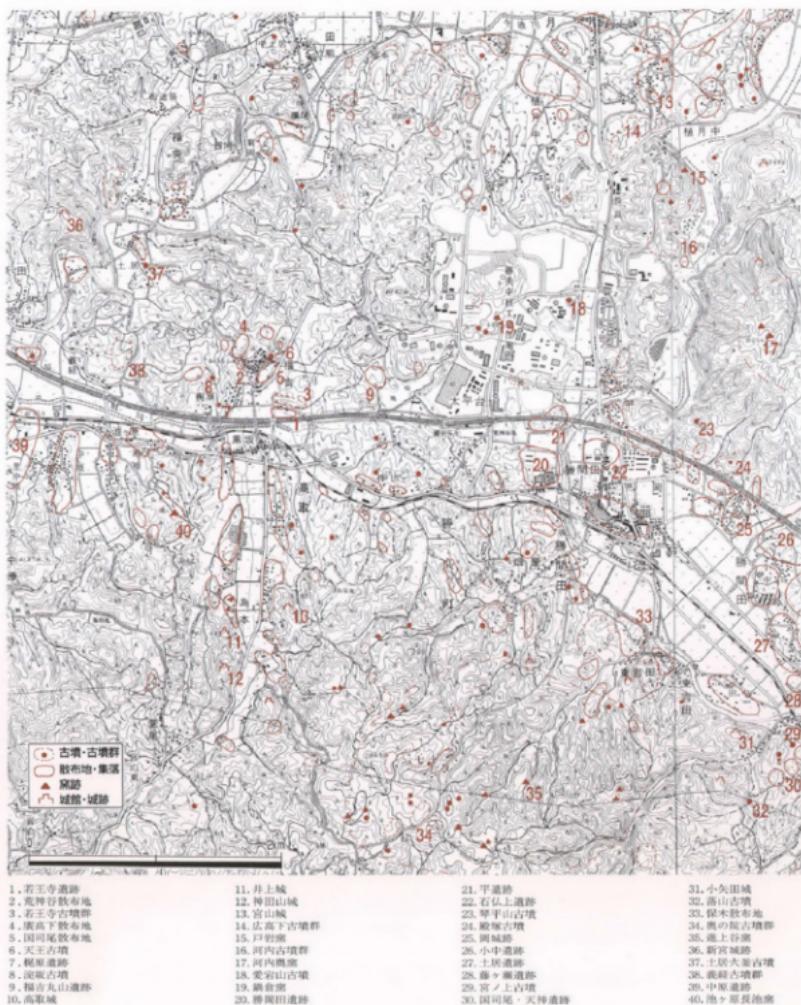
現在、町内最古の遺物として金鶏塚遺跡で縄文時代前期の押型文土器が採集されている。弥生時代には、主に中期以降に多くの集落が展開する。代表的なものに小中遺跡がある。小中遺跡は弥生時代中期から後期の集落遺跡で300軒を越す住居跡が発見されており、滝川下流域の拠点的な集落と考えられる。福吉地区周辺では、今回報告する荒神谷周辺の丘陵上に弥生の散布地が点在し、若王寺遺跡でも僅かに土壙が存在する等、付近に集落が存在するようである。続く古墳時代では、非常に多くの古墳が存在する。まず町北部の美野平野周辺に美作最大の植月寺山古墳（全長約90m）や美野高塚古墳（全長約70m）等を初め多くの前期～中期の前方後方墳が密集する。南部の勝間田周辺でも前方後方墳の岡高塚古墳（全長56m）、前方後円墳の琴平山古墳（全長48m）、殿塚古墳（全長48m）が存在する。中期後半以降は、前方後円墳の愛宕山古墳（全長28m）を筆頭に、竪穴系の群集墳である広高下古墳群、後期後半には横穴式石室を中心とする奥の院古墳群、岡高塚古墳群が確認されている。福吉地区周辺においても、若王寺古墳群があり丘陵上に5基の円墳が存在する。また、この時期、製鉄関連の遺跡として福吉丸山遺跡が調査され、住居跡や、鍛冶炉が確認されている。つづく古代の遺跡では、勝間田に勝田郡衙跡に比定される勝間田・平遺跡がある。他には小中遺跡で奈良時代の掘立柱建物群が確認されているのみで、周辺部の一般集落については不明な点が多い。平安～鎌倉時代にかけての遺跡では、間山周辺もしくは畠屋・東吉田一帯で須恵器系の中世陶器である勝間田焼の窯が50基以上確認されており、勝間田古窯跡群と呼称されている。最近、本報告の若王寺遺跡を初め、土師器窯が発見された石仏上遺跡、大型掘立柱建物が発見された藤ヶ瀬遺跡など、消費地である集落遺跡の調査例が増加しつつあり、勝間田周辺部の様子が浮き彫りになりつつある。中世後期には植月宮山城や小矢田城が代表的なものである。中世期



第1図 遺跡位置図

の福吉周辺は、美作国鷹取庄の一部に含まれており、福吉地区の南の為本地区には遺構の残りのい神田山城が築かれている。初代城主は鷹取庄領主藤原種憲とされる。また、室町期には鷹取庄に備前刀工をよんで刀を打たせたとされる。近世には参勤交代のため出雲街道の宿場町として勝間田が整備され、若王寺遺跡の南100mには出雲街道が走っている。

※本文は勝央町教育委員会編 1999『福吉丸山遺跡』の第2章 遺跡の位置と環境をもとに作成し、その後の新知見について補足をおこなったものである



第2図 周辺の遺跡分布図(1/40000)

第2章 発掘調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

勝央町では、平成11年度新規事業として福吉地区基盤整備促進事業の計画を策定した。事業は平成11年度から2ヵ年計画で、福吉地区、黒坂地区にまたがる10haの農地を改良する計画である。事業予定地内は、計画当初段階には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在していなかったが、工事対象面積が広大であり、周辺の地形から遺跡の存在する可能性が考えられたので、まず事前に分布調査を実施することとなった。平成10年12月に実施し、2地点で多くの遺物が採集され遺跡の存在が予想された。この結果を踏まえ、事業者である勝央町建設課と協議を行い、事前に試掘調査を実施して遺跡が確認された範囲については、その保護について改めて協議することになった。確認調査は平成11年4月に荒神谷地区、11月に若王寺地区の2回に分けて実施した。調査の結果、両地区で遺構・遺物が発見され、遺跡の存在が明らかとなった。まず荒神谷地区については、勝央町から町教育委員会宛、平成12年11月26日付けで文化財保護法57条の6の規定による埋蔵文化財発見通知が提出され協議を行った。その結果、設計では盛土部分にあたり現状保存されることとなった。つづく若王寺地区については、勝央町から町教育委員会宛、平成12年5月24日付けで文化財保護法57条の6の規定によ



第3図 囲場整備計画範囲図(1/10000)

る埋蔵文化財発見通知が提出され協議を行った。若王寺地区は、当初の設計のままでは遺跡全体が削平されることになり、調査期間および調査費用が膨大になるため、その保護について改めて協議をおこなった。その結果、工事計画の大幅な変更が行われ、大部分は盛土保存とすることで合意した。わずかに、道路部分や排水管埋設部については遺跡の破壊を免れず、全面調査が必要となった。調査は平成12年6月12日から8月10日及び、平成12年10月17日から12月8日まで実施した。

第2節 確認調査・発掘調査の経緯と概要

確認調査は平成11年4月13日から4月30日と11月18日から12月10日の2回に分けて実施した。計画範囲内で遺物散布の認められた範囲にトレントを設定し、遺構の有無の確認と地層堆積状況の把握を行い、記録を作成した。全面発掘調査は、西からA区、B区、C区の3箇所を調査することになった。いずれの地区も表土を重機で除去後、人力で包含層掘削、遺構の精査、掘削を行った。個別の遺構については半裁、もしくは土層観察用のベルトを残し、実測、写真撮影等の記録を作成した。図面は、個別遺構を1/20、全体平面を1/50縮尺で作成した。A区は平成12年6月12日から8月10日までの期間で実施した。包含層、遺構埋土は黒ボク土で、北東側は削平により表土直下に地山が現れるが、南に地形が下がるにつれて黒ボクの厚い堆積が認められた。遺物や溝などの多くの遺構を確認した。8月2日には空撮を実施し、4日には地元対象の現地説明会を開催した。つづくB、C区は平成12年10月17日から12月8日までの期間で実施した。B区は幅が狭く長大な調査区であったが、遺跡の中心付近と思われ、残りはよくないものの多くの遺構を確認した。地山は削平を受けているようである。C区は遺跡の東端と考えられる位置であったが、多数の溝状遺構や、造成された段と見られる平坦面を確認した。報告書作成は、平成15年10月～平成16年3月の期間で実施した。遺物洗浄は現地調査中にすべての遺物を終了させていたため、作業はマーキングからであったが、実際の遺物整理作業は3ヶ月間であり、十分な期間を割くことができなかった。平成16年3月に本報告書を刊行した。

第3節 発掘調査の体制

平成12年度 調査主体 勝央町教育委員会 教育長 岸本 耕二
 社会教育課 課長 福本 浩二／課長補佐 石川 寛次／主任 竹内 祐三
 技術吏員 團 正雄（調査・整理担当）／主任補 鈴木 具功



A区調査参加者



B・C区調査参加者

第3章 確認調査の概要

第1節 荒神谷地区の概要

T 1 表土下 50 cmで弥生中期の包含層である黒色砂質土を検出する。遺構は確認されなかった。

T 2・T 3 遺構・遺物とも確認されなかった。

T 4 表土下 60 cmで灰褐色層を確認し、この面で土壤が確認された。時期は中世と考えられる。

T 5 遺構・遺物とも確認されなかった。



第4図 試掘トレーンチ配置図(1/5000)

T 6・T 7 丘陵斜面に設定した。表土下 50 ~ 60 cm で地山に達し、この面で近世墓を計 4 基確認した。

T 8 遺構・遺物とも確認されなかった。

T 9 断面が露出していた箇所を精査したところ、土壙が 2 基確認された。須恵器、土師器が少量出土している。時期は古代～中世と考えられる。

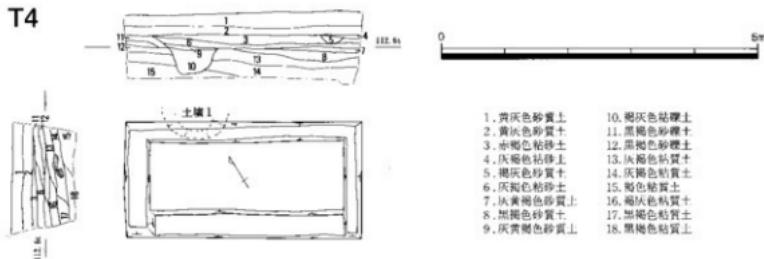
第2節 若王寺地区の概要

T 1 表土下 40 cm で黒褐色土、さらに 10 cm 下で地山を確認した。遺構は地山上で検出し、土壙の他ピット多数を確認した。黒褐色土からは勝間田焼、土師器が出土するが量は少ない。また土壙からは少量の弥生土器片、石錐片が出土している。

T 2 表土下 20 cm で黒褐色層、その下 10 cm で地山を確認した。ピットが検出され、須恵器が少量出土している。

T 3 表土下で中世～近世の遺物を多く含む灰褐色層があり、その下層に黒褐色層が存在する。この面で幅 1.2 m、深さ 20 cm の溝を検出した。時期は中世と考えられる。黒褐色層下は地山である。地山面でもピットを検出した。

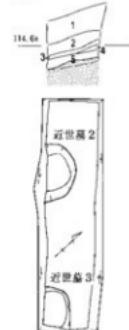
T4



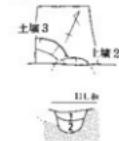
T6



T7



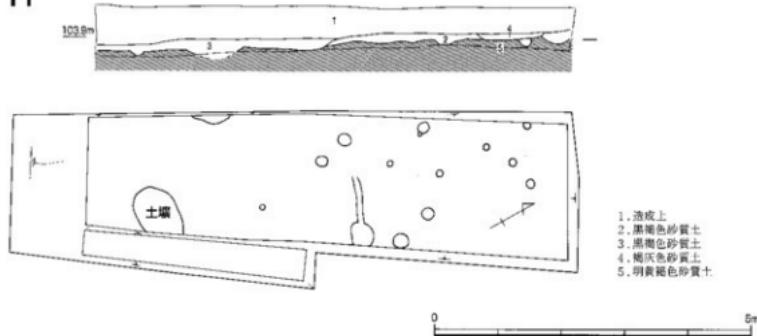
T9



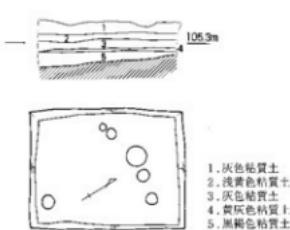
第5図 荒神谷地区トレーン平面・断面図(1/80)

- T4・T5 灰色粘土層が何層も堆積し、包含層等は確認できなかった。
- T6・T7 遺構・遺物は確認されなかった。
- T8 表土下の造成土を取り除くと黒色土と黄色土で構成される盛土状遺構を検出した。すぐ西に間連すると思われる直径2mの古墓があり倒壊した五輪塔がある。
- T9 地表下80cmで地山を確認し、ピット、溝を検出した。

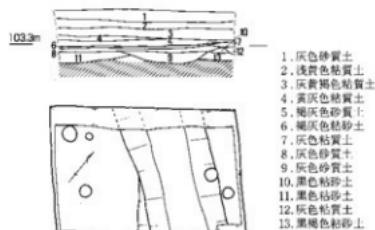
T1



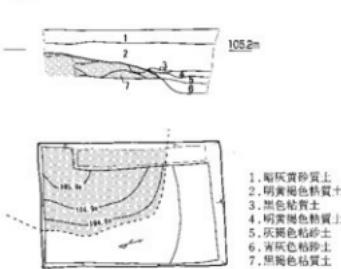
T2



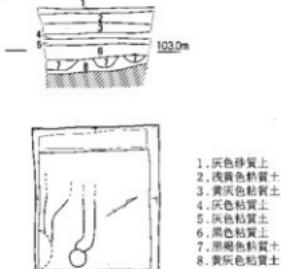
T3



T8



T9



第6図 若王寺地区トレンチ平面・断面図(1/80)

T 10・T 11 遺構・遺物とも確認されなかった。土層からは湿地帯と思われる。

T 12・T 13 遺構は確認されなかったが、少量の土器片が出土した。

T 14 砂層と粘土層が見られ、氾濫原と思われる。少量の遺物が出土した。

T 15 表土直下で地山を検出。遺構・遺物とも確認されなかった。

第3節 試掘調査のまとめ

まず荒神谷地区では丘陵先端付近に遺構が確認され、東側の散布地に続くと考えられる。遺構密度は低い。時期は弥生～中世・近世と考えられる。若王寺地区では中国道北側の丘陵南裾の緩斜面一帯に濃密な遺構分布が認められた。遺構では柱穴、土壤、溝等が多い。時期は弥生～中世・近世と考えられ、特に包含層からは中世の遺物が多く出土している等、この時期の集落跡である可能性が高い。

荒神谷地区試掘写真



T 4 (東から)



T 6 (東から)



T 7 (西から)

若王寺地区試掘写真



T 1 (東から)



T 2 (東から)

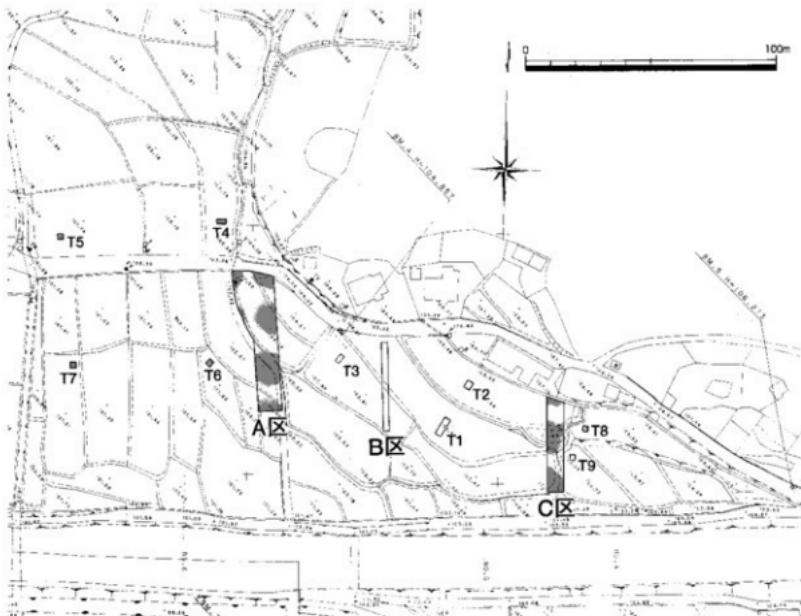


T 3 (南から)

第4章 本発掘調査の概要

第1節 遺跡の立地と調査の概要

若王寺遺跡は丘陵裾部の緩斜面に立地している。周辺の水田部より高所にあたり、古墳～中世期の土器が広範囲に広がる散布地であった。さらにすぐ北側の尾根には5基の円墳が密集する若王寺古墳群もあり、当初から当時期の集落の存在が予想されていた。試掘の結果からも弥生～中世の集落跡を推定させる結果となった。全面調査は3箇所を対象とし、斜面地形に直交する形の細長いもので、50mづつ離れている。これらの調査区を西からA区、B区、C区と呼称し調査をおこなった。調査総面積は約1000m²である。付近の基本的な地層は、地山が黄褐色粘土層で、包含層や遺構埋土が黒ボク土や黒褐色砂質土を中心であり、一部の黒ボク層上から切り込む遺構を除いては遺構の識別は比較的容易であった。付近は近世以降、田畠造成のため包含層や地山を削って段々に削平しており、場所によっては遺構の残りが悪い箇所もあったが、多くの遺構が検出された。A・B区では遺構密度が高く、C区はやや低いという状況である。遺構内容では、掘立柱建物を構成するビットが多く、溝等も多い。



第7図 若王寺遺跡調査区(1/2000)

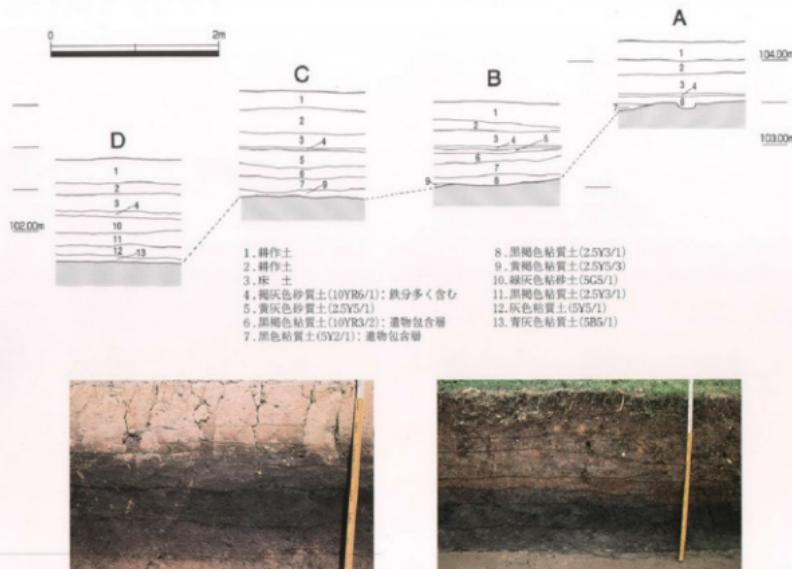
時期は弥生時代・古墳時代・鎌倉時代～近世のものがあるが、鎌倉時代から後の時代の遺構が圧倒的に多かった。弥生・古墳時代は遺構数が少なく、また残りもよくない。全体的に出土遺物が少ないため、遺構の時期決定が困難な状況であったが、包含層の年代観や埋土の状況から時期を決定した。以下、各地区の遺構・遺物の概要について述べる。

第2節 A区の遺構・遺物

1. 調査区の概要

長さ 50 m の調査区である（第9図）。調査区全体の地形は、南西に向けてゆるやかに下る斜面地である。調査区南北端の地山で 2 m の比高差があり包含層も厚く堆積する。近年の田畠造成等により地山面が平坦に造成され、3段に分かれることから、これをもとに便宜上北から A 1～A 3 の 3 つのブロックに分けて調査をおこなった。堆積状況は部分的に 4 箇所を取り上げて示した（第8図）。大きく分けて表土・旧耕作土（1～4）、遺物包含層（黄灰色砂質土層 5、黒褐色土層 6～9）、地山となるが、さらに細かく細分される。包含層では特に 5・6 層から多くの遺物が出土した。遺構面は 2 面あり、7 層上面で溝等が検出された。その他の大部分の遺構は最終の地山面で検出をおこなった。

2. 遺構の概要



第8図 A区東壁断面図(1/60)



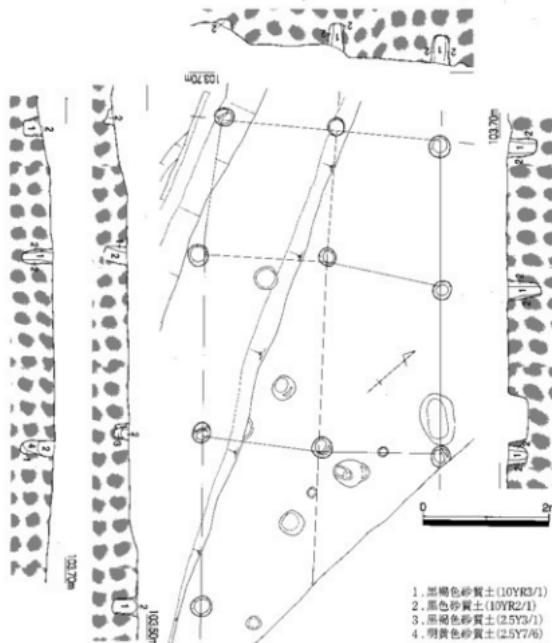
第9図 A区遺構配置図(1/200)

掘立柱建物1（第10図）

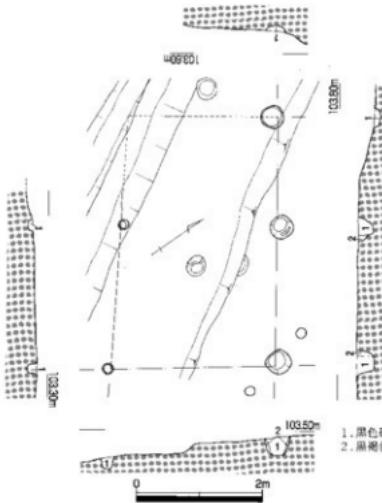
A1区、調査区内で最も高所の標高103.50m付近に位置する掘立柱建物である。3間×2間の総柱構造をとる。規模は東側が調査区外へ続くため全体を検出しえなかった。現存の規模で桁行7.8m、梁行3.5m、床面積27m²を測る。棟方向はN-45°-Wである。柱間長は2.5mと規則的であるが、北側の一列のみが2.0mとやや短くなっている。柱穴はいずれも直径20~25cmで、深さ40cm~50cmを測り、柱痕を残すものが多い。柱穴の埋土は基本的に黒褐色砂質土である。柱穴からの出土遺物は非常に少なく、少量の土器片が出土している。建物時期を明確にできる遺物はないものの、勝間田焼と考えられる土器片が出土していることから、概ね12世紀~13世紀と考えられる。なお、後述する構1は位置関係からこれに伴うものと考えられる。

掘立柱建物2（第11図）

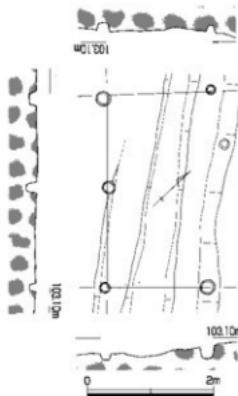
A1区、標高103.50m付近に位置する掘立柱建物である。現存の規模は、2間×1間で桁行4.0m、梁行2.8m、床面積11.2m²を測る。棟方向はN-55°-Wである。西側の一列は後世の造成により上部を失われ、2つの柱穴がかろうじて残っていた状況である。柱間長は規則的である。柱穴はいずれも直径30cm前後とやや大きく、深さ20cmを測る。埋土は基本的に黒褐色砂質土である。出土遺物は柱穴から少量の土器片が出土しているが、時期を明確にできる遺物はない。埋土等の状況から12世紀~13世紀と考えられる。なお、掘立柱建物1とは重複する位置にあり、前後関係が考えられる。



第10図 掘立柱建物1(1/80)



第11図 掘立柱建物 2 (1/80)



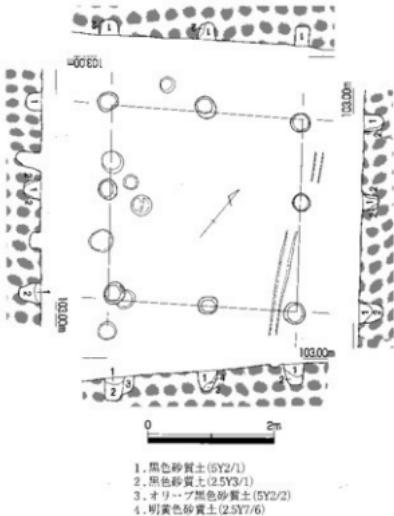
第12図 掘立柱建物 3 (1/80)

掘立柱建物 3 (第12図)

A 1区～2区、標高103.00m付近に位置する掘立柱建物である。規模は、1間×2間で桁行3.0m、梁行1.6m、床面積4.8m²を測る。棟方向はN-47°-Wである。柱穴はいずれも直径15cm以下と小さい。埋土は基本的に黒褐色砂質土である。遺物は出土していないが、概ね12世紀～13世紀と考えられる。ここでは掘立柱建物としたが、柱穴が小さいことから、小さな小屋や仮設の建物の可能性も考えられる。

掘立柱建物 4 (第13図)

A 2区、標高103.00m付近に位置する掘立柱建物である。規模は2間×2間で、桁行3.0m、梁行3.0m、床面積9m²を測る。棟方向はN-38°-Wである。柱間長は規則的である。柱穴はいずれも直径25～30cm、深さ40～50cmを測りしっかりしている。埋土は黒色砂質土である。出土遺物は柱穴から少量の土器片が出土しているが時期を明確にできる遺物はない。概ね12世紀～13世紀と考えられ

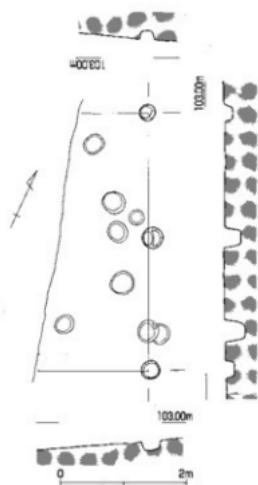


第13図 掘立柱建物 4 (1/80)

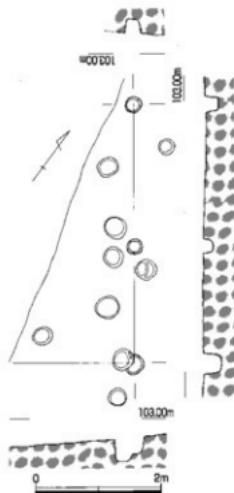
る。

掘立柱建物5（第14図）

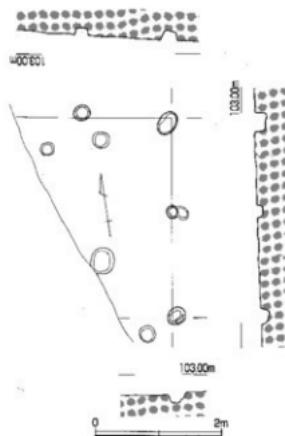
A2区、標高103.00m付近に位置する掘立柱建物である。規模は西側が調査区外へ続くため全体を検出しえなかった。規模は2間×1間以上で、桁行4.0mを測る。棟方向はN-25°-Wである。柱穴はいずれも直径25cm、深さ10cm～30cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物は無いが、概ね12世紀～13世紀と考えられる。



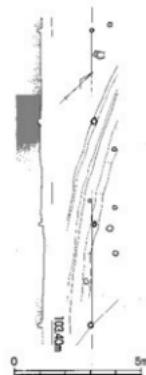
第14図 掘立柱建物5(1/80)



第15図 掘立柱建物6(1/80)



第16図 掘立柱建物7(1/80)



第17図 構1(1/200)

掘立柱建物 6 (第15図)

A2区、標高103.00m付近に位置する掘立柱建物である。規模は西側が調査区外へ続くため全体を検出しえなかった。規模は2間×1間以上で、桁行4mを測る。棟方向はN-36°-Wである。柱穴はいずれも直径20cm前後で、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物は無いが、概ね12世紀～13世紀と考えられる。

掘立柱建物 7 (第16図)

A2区、標高103.00m付近に位置する掘立柱建物である。規模は西側が調査区外へ続くため全体を検出しえなかった。現状で2間×1間、桁行3.2m、梁行1.6m、床面積5.2m²を測る。棟方向はN-9°-Eである。柱穴は直径15～20cmで、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物は無いが、概ね12世紀～13世紀と考えられる。

構1 (第17図)

A1・2区に位置する。掘立柱建物1と主軸が揃うことから付随する施設と考えられる。規模は3間分で4.7mを測り、南に延びている。柱穴間隔は1.5mとほぼ揃っている。個々の柱穴は10cm、深さも5cm程度と小さい。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが掘立柱建物1と同時期と考えられる。

土壤1 (第18図)

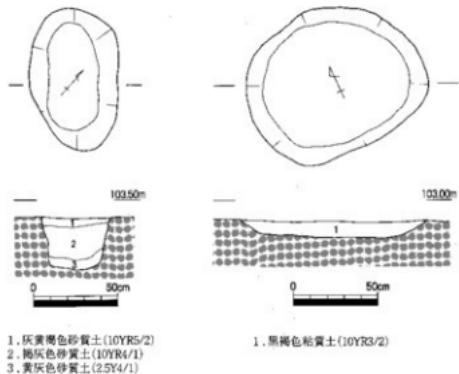
A1区、標高103.50m付近に位置する。掘立柱建物1の柱穴に接する。形態はだ円形もしくは隅丸長方形で長軸80cm、短軸は検出範囲で55cmを計る。深さは検出面から50cmで、底面の高さは標高129.50mである。埋土は3層に分かれ、黄褐色砂質土が堆積している。出土遺物は無いが、埋土から13世紀以降と考えられる。

土壤2 (第19図)

A2区、標高103.00m付近に位置する。黒褐色上面で検出された。形態は円形で直径106cm、深さは10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土が堆積している。出土遺物は無いが、検出状況から13世紀以降と考えられる。

不明遺構 (第20図)

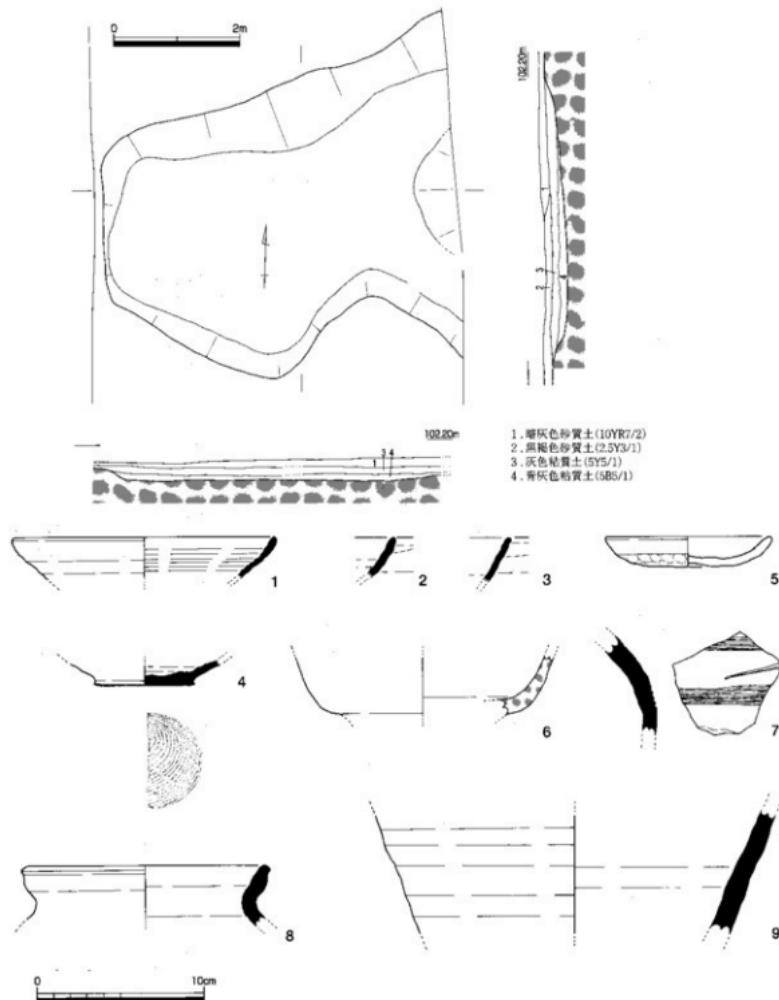
A3区、調査区南端の地形の低くなった標高102.0m付近に位置する。平面形態は不整形である。北側は直線的、南側は「へ」の字に屈曲している。東は調査区外に延び、全形は判明しなかった。遺構底部が東側で島状に高くなっているため、土壤状の遺構に東北および南東方向に延びる溝が取り付いたものと考えられる。規模は中央で南北長5.6m、東西残存長4.0m、深さは検出面から40cmを測る。埋土は4層に分かれ、自然に埋没したようである。第4層は青灰粘質土が堆積し段んだ層が見ら



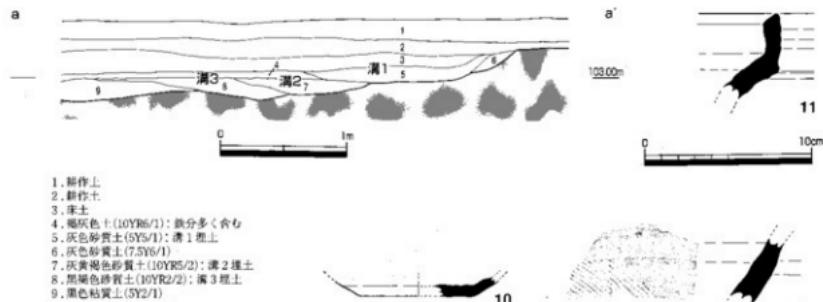
第18図 土壌1 (1/30)

第19図 土壌2 (1/30)

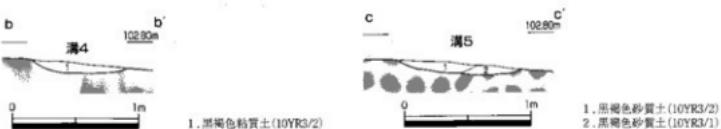
れる。これらのことから、性格としては集水・水溜施設の可能性が考えられる。遺物は勝間田焼、備前焼、須恵器、土師器、瓦質土器、青磁が上層中から出土しているが、細片が多く図化できないものが多い。勝間田焼では1～4の碗、7の壺がある。5は土師器皿で、輦轆を用いておらず、底部の指圧痕が目立つ。6は青磁碗である。8は須恵器壺で混入と考えられる。これらの遺物等から時期は12世紀～14世紀と考えられる。



第20図 不明構(1/80)・出土遺物(1/3)



第21図 溝1～3断面図(1/40)・溝2出土遺物(1/3)



第22図 溝4・溝5断面図(1/40)

溝1 (第21図)

A 1区と2区の境目である現代の削平された段に沿う。斜面に平行し、弧状にゆるくカーブしながら南北に延びる。残存長は20mで幅1m、山側で深さ30cmを測る。出土遺物は無いが、埋土の状況や、現代の削平段に沿っていることなどから時期は近世～近代以降と考えられる。

溝2 (第21図)

溝1同様、斜面に並行し、弧状にカーブしながら南北に延びる。溝1に東肩を切られるかたちでは並行している。そのため、北半分は削平されている。残存長は15mで幅1m、深さ15cmを測る。遺物は10の勝間田焼挽、11・12の備前焼すり鉢が出土している。図化できなかったが、土師器、瓦質土器、須恵器等も出土している。これらの遺物や埋土から時期は近世と考えられる。

溝3 (第21図)

溝1・溝2と同様に弧状にカーブしながら南北に延びている。溝2に東肩を切られるかたちで並行する。残存長は6mで、幅1.2m、深さ15cmを測る。出土遺物は無いが、埋土や検出状況から時期は近世で溝2より古い遺構と考えられる。

溝4 (第22図)

A 2区に位置する。黒褐色層上面で検出された溝である。斜面に並行しほば南東方向に延びる。北側は削平のためか途中で終わっている。残存長は8mで、幅1.0m、深さ10cmを測る。出土遺物は無いが、埋土や検出状況から13～14世紀と考えられる。

溝5 (第22図)

A 2区に位置する。黒褐色層上面で検出された溝で、溝4に続いている。斜面に並行しほば南東方向に延びる。残存長は4.6mで、幅1.0m、深さ10cmを測る。出土遺物は無いが時期は13～14世紀

と考えられる。

溝6（第23図上）

A 2区に位置する。黒褐色層上面で検出された溝である。斜面に直交し北東方向に延びる。残存長は3.2mで、幅60cm、深さ15cmを測る。出土遺物は無いが、埋土や検出状況から13～14世紀と考えられる。

溝7（第23図中）

A 3区に位置する。南東方向に直線的に延びる。残存長は8mで、幅50cm、深さ5cmを測る。出土遺物は無いが、埋土から13～14世紀と考えられる。

溝8（第23図中）

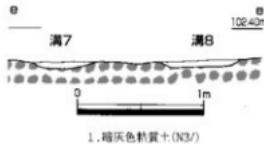
A 3区に位置する。溝8に並行し南東方向に直線的に延びる。残存長は4mで、幅50cm、深さ5cmを測る。出土遺物は無いが、埋土から13～14世紀と考えられる。

溝9（第23図下）

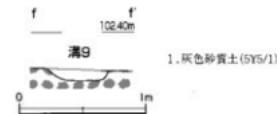
A 3区に位置する。西南方向に直線的に延びる。残存長は8m、幅40cm、深さ5cmを測る。斜面に直行し、溝8を切っている。出土遺物は無いが埋土から時期は13～14世紀と考えられる。



1. 黒褐色粘質土(10YR3/2)

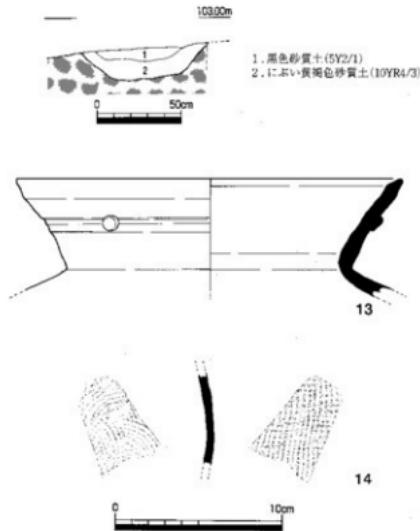
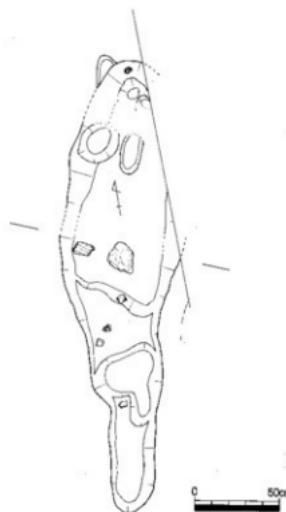


1. 暗灰色粘質土(10Y3/2)



1. 灰色砂質土(5Y5/1)

第23図 溝6～9断面図(1/40)



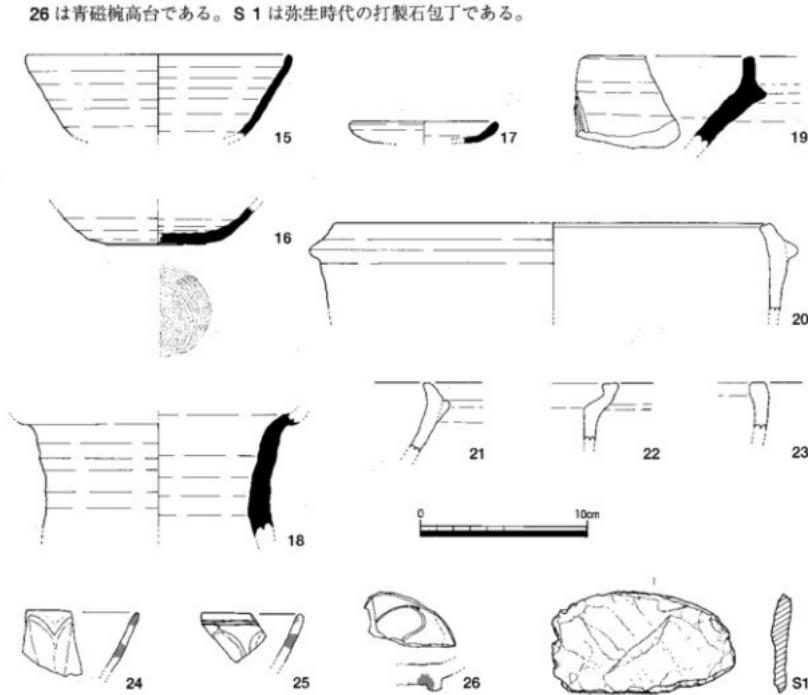
第24図 溝10(1/30)・断面図(1/30)・出土遺物(1/3)

溝10（第24図）

A2区に位置する。斜面に直交し、南北に延びる。溝3により北側が削平されている。残存長は2.5m、最大幅50cm、深さ10cmを測る。埋土は2層にわかれ、黒色砂質土が堆積する。遺物は13・14の須恵器甕が出土している。13は甕口縁部で、一条の沈線に粘土浮文が見られる。14は同一個体の体部で、外面に格子目タタキ、内面に同心円文が認められる。これらの遺物から時期は古墳時代中期頃と考えられる。

その他の出土遺物（第25図）

包含層である灰褐色砂質土、黒褐色砂質土から多くの遺物が出土している。全体に細片が多いため、図化できるものは少ない。遺物では勝間田焼、土師器、備前焼、瓦質土器、青磁、鉄滓等が多い。その他、比較的多くの須恵器も出土している。勝間田焼では15・16の碗、17の小皿、18の壺口縁がある。図化していないが格子目を施す甕も多い。備前焼では19のすり鉢がある。瓦質土器では、20・21の羽釜、22・23の鍋等がある。青磁では24・25が甕口縁で連弁が見られる。26は青磁碗高台である。S1は弥生時代の打製石包丁である。



第25図 A区その他の出土遺物(1/3)

第3節 B区の遺構・遺物

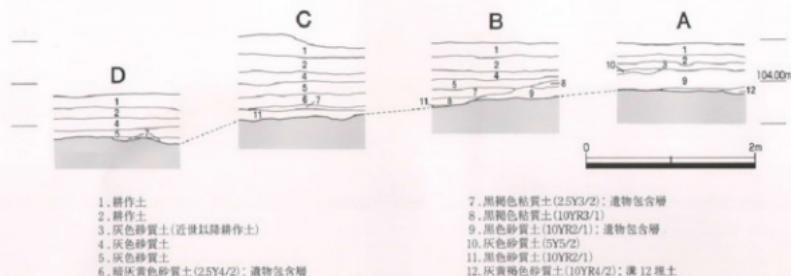
1. 調査区の概要

長さ35m、幅2mの調査区である（第27図）。調査区全体の地形は、南に向けてゆるやかに下る斜面地である。調査区北端での地山は標高104.0mと遺跡の中でも一番高い位置にあり、遺構密度が高かったが、調査区幅が狭小なことや各時代に地下げが行われている状況であり、全容がわかる遺構は少なかった。堆積状況は部分的に4箇所を取り上げて示した（第26図）。大きく分けて表土・旧耕作土（1～5）、遺物包含層（黒褐色土層7～9、黒色砂質土層11）、地山となる。A区に比べ包含層からの遺物は非常に少なかった。遺構面は1面で、最終の地山面での遺構検出をおこなった。

2. 遺構の概要

住居跡1（第28図）

調査区中央、標高103.80m付近に位置する。中世以降の削平により掘り込みは残存していないが、周壁溝と考えられる細い弧状の溝が多く確認された。それらの配置等から住居跡と判断した。規模は西側が調査区外へ続くため確認できなかつたが、平面は円形を呈し南北で直径5.8mを測る。深さは周壁溝の一番深いところで5cmであるが、痕跡のみのところもある。住居に伴うと考えられる柱穴は2基確認され、4本柱構造であったと考えられる。柱穴の規模は直径20cm、深さ20cmを測る。埋土は黒色砂質層である。遺物は出土していないが、埋土や平面形状から時期は弥生時代と考えられる。



B区北半西壁土層断面

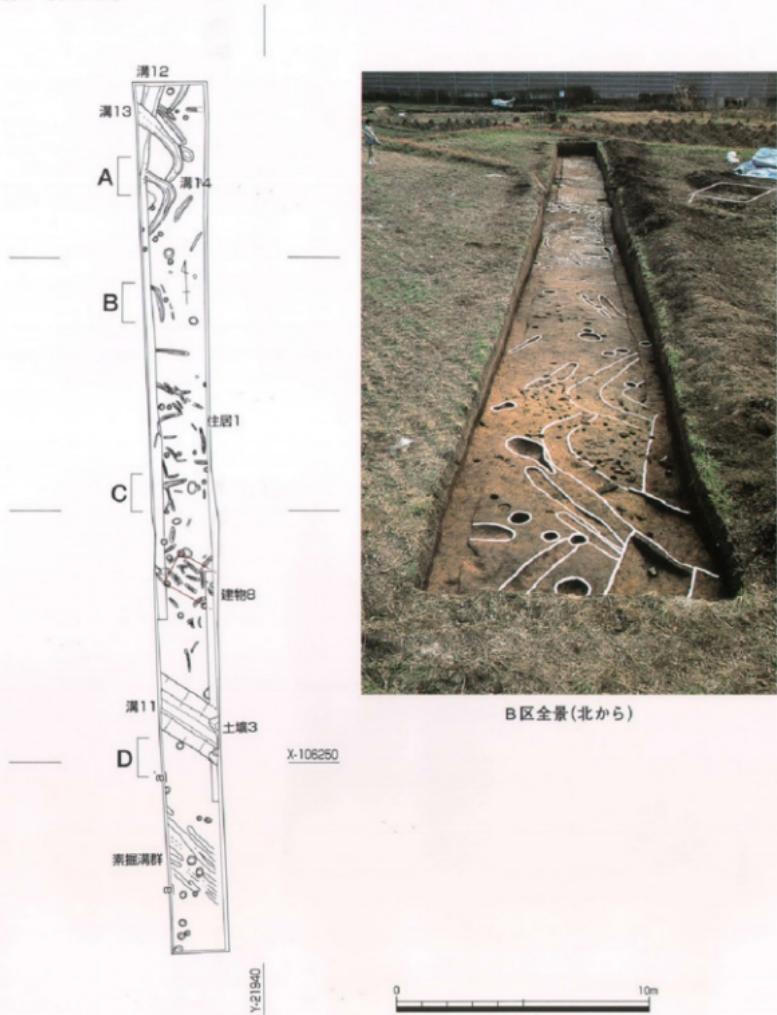
B区南半西壁土層断面

第26図 B区西壁断面図(1/60)

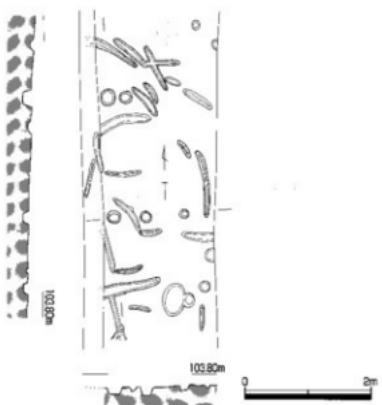
掘立柱建物8（第29図）

調査区中央、標高103.70m付近に位置する掘立柱建物である。規模は検出できた範囲では1間×1間で、桁行1.7m、梁行1.4mを測る。棟方向はN-65°-Wである。柱穴はいずれも直径20cmで、深さは10cmを測る。遺構埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土していないが、埋土等から、12～13世紀と考えられる。

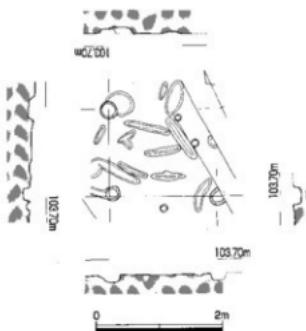
土壤3（第30図）



第27図 B区遺構配置図(1/200)



第28図 住居 1 (1/80)



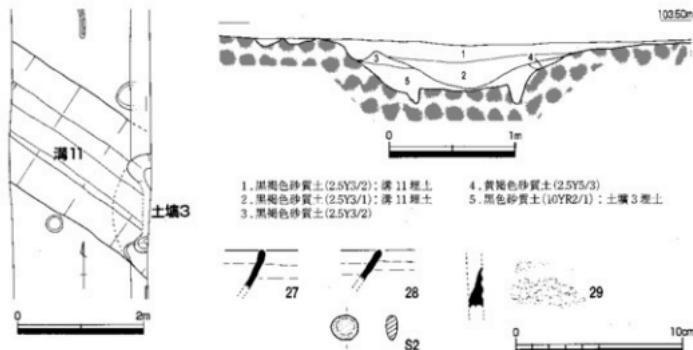
第29図 掘立柱建物 8 (1/80)

調査区南側に位置する。溝 11 に上部を切られており、溝 11 の完掘後に検出された。そのため残りは悪く、平面形も不明であるが円形であったと考えられる。規模は現状で直径 2.0 m、幅 40 cm 以上深さ 70 cm を測る。埋土は溝 11 と明確に区別され、黒色砂質土が堆積している。遺物は出土していないが、埋土から時期は弥生時代と考えられる。

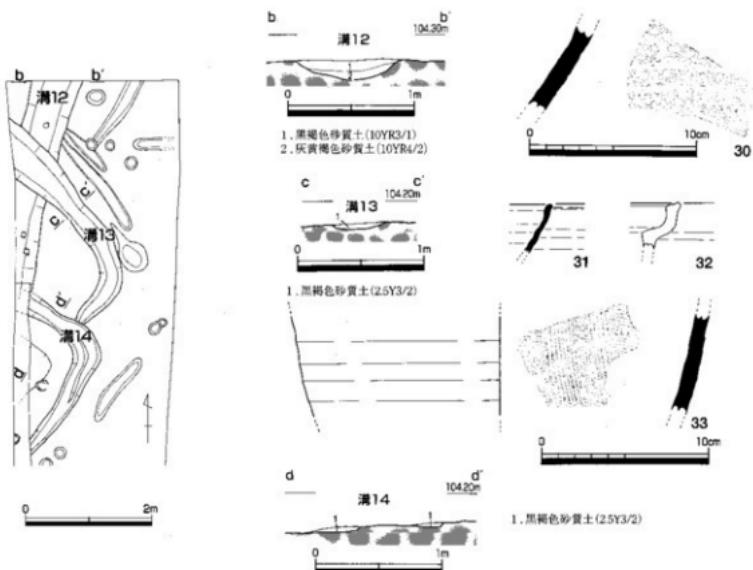
溝 11（第 30 図）

調査区南側に位置する。南東方向に真っ直ぐ延びると考えられ、検出できた範囲で長さ 2 m、幅 2 m、深さ 60 cm を測る。断面は逆台形を呈し、二段に掘られている。埋土は黒褐色砂質土層が堆積していた。遺物は非常に少ないが勝間田焼が出土している。27・28 は椀で 29 は壺である。S2 は黒色の河原石で基石と思われる。遺構の時期は、出土土器や埋土から 13 世紀～14 世紀と考えられる。

溝 12（第 31 図右上）



第30図 土壌 3・溝 11(1/80)・断面図(1/40)・溝 11 出土遺物(1/3)



第31図 溝12~14(1/80)・断面図(1/40)・溝12・13出土遺物 (1/3)

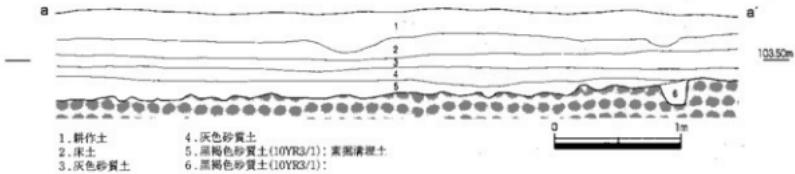
調査区北端、最も高所に位置する。斜面に直交しはば南北に延びる。後述する溝13・溝14に切られている。規模は現状で3.8m、幅70cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色砂質土が堆積していた。遺物は勝間田焼、須恵器等が出土している。30は勝間田焼窯である。このことから時期は12～13世紀と考えられる。

溝13 (第31図右中)

調査区北端に位置する。平面は逆「L」字形で、溝12を切っている。東方向に1.7m延びて、直角に折れ曲がって南西に60cm延びる。幅は40～60cm、深さは10cmを測り、削平が著しい。埋土は黒褐色砂質土が堆積していた。遺物は勝間田焼、瓦質土器等が出土している。勝間田焼では31の椀、33の壺がある。32は瓦質鍋である。このことから時期は12～13世紀と考えられる。

溝14 (第31図右下)

調査区北端に位置する。平面は逆「L」字形で、東方向に1.4m延びて、直角に折れて南に2m延びる。幅は30cm、深さは5cmを測る。また、溝で囲まれた位置に柱穴2基と一段下がった平坦面が



第32図 B区素掘溝群断面図(1/40)

確認された。関係するものと考えれば、本来溝は建物に付随したものと考えられる。遺物は出土していないが、時期は12～13世紀と考えられる。

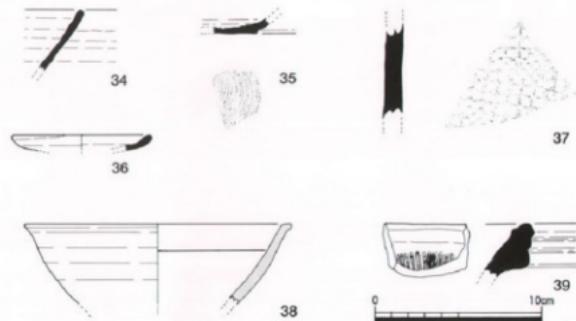
素掘溝群（第32図）

調査区の南端、溝11の南2mの位置から素掘溝群が見られる。幅10cm、深さ2cm程度の小溝が東南方向に並行して多数検出された。それぞれの溝は長さや深さが一定でなく、何回も掘削された状況を示す。土色は黒褐色砂質土が堆積している。このような状況から畠の耕作跡と考えられる。時期は遺物が無く不明であるが、12～13世紀と考えられる。

その他の出土遺物

(第33図)

包含層からの遺物量は少なく、図化できるものも少ない。遺物では勝間田焼、須恵器、備前焼、瓦質土器、白磁、鉄滓等がある。勝間田焼では34・35の椀、36の小皿、37の甕がある。38は白磁碗である。備前焼では39のすり鉢がある。

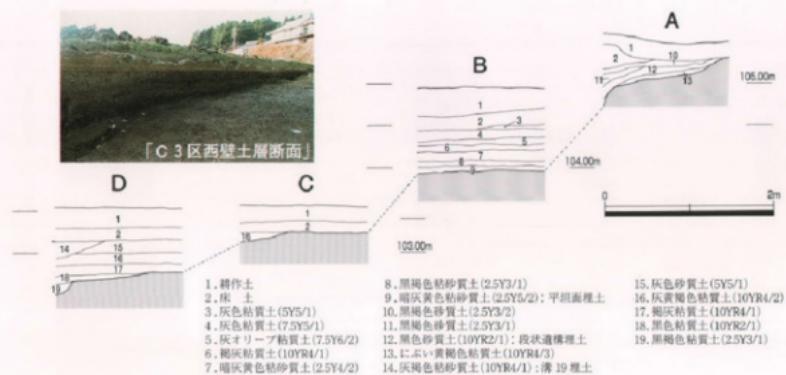


第33図 B区その他の出土遺物(1/3)

第4節 C区の遺構・遺物

1. 調査区の概要

長さ35m、幅7mの調査区である。(第35図)近年の田畠造成で三段に造成され、旧地形を把



第34図 C区西壁断面図(1/60)

握るのは困難であるが、本来の地形は南東へ急に下る斜面地と思われる。ここでも三段の高い位置から順にC1～C3のブロックに分けた。堆積状況は部分的に4箇所を取り上げて示したが、土地改変が著しい（図34）。基本的な層序は耕作土、灰褐色土、黒褐色土、黒褐色土、地山となり、概ねA区、B区に対応している。遺構面は2面で、溝18・溝19以外は地山上での検出である。またC2区の造成された段は後世の削平ではなく、後述のように地山を造成した段状遺構と考えられる。遺物はC2をを中心に比較的多く出土している。

2. 遺構の概要

掘立柱建物9（第36図）



第35図 C区遺構配置図(1/200)

C 1 区、標高 105.40 m 付近に位置する掘立柱建物である。検出面はおおきな削平を受けている。規模は、1間×1間で桁行 3.2 m、梁行 2.0 m を測る。棟方向は N-65°-W である。柱穴はいずれも直径 25 cm、深さ 10 cm を測る。埋土は黒褐色砂質土が堆積していた。出土遺物はないが、埋土等の状況から 12 世紀～13 世紀と考えられる。

柱穴列 1 (第37図)

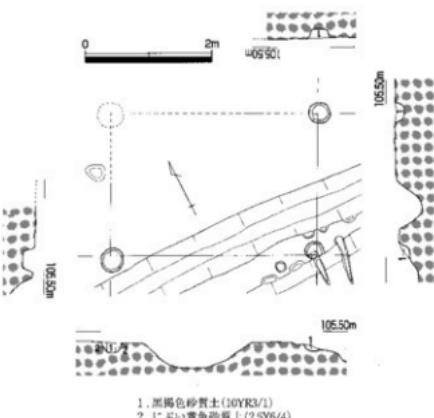
C 3 区、調査区南端に位置する。標高 102.70 m、溝 19 よりも 50 cm 下の地山面で検出された。規模は 2 間で、柱間隔は 2.5 m で掘っている。柱穴は直径 20 cm、深さ 10 cm を測る。出土遺物はないが、埋土等から時期は古墳時代と考えられる。

溝 15 (第38図左上)

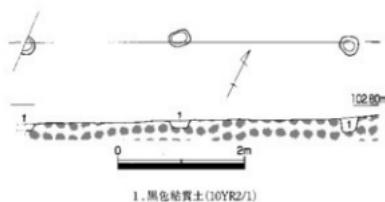
C 1 区に位置する。東西方向に直線的に延び、調査区西端で溝 16 に切られている。規模は現状で、長さ 8 m、幅 80 cm、深さ 50 cm を測る。埋土は黒褐色砂質土層が堆積していた。遺物は土師器片等が少量出土しているのみである。時期は土色等から 12 ～ 13 世紀られる。

溝 16 (第38図左下)

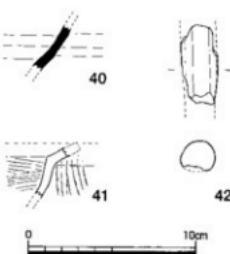
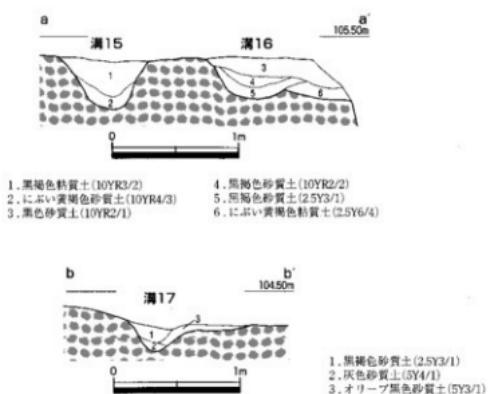
C 1 区に位置する。溝 15 に並行するが、西



第36図 掘立柱建物 9 (1/80)



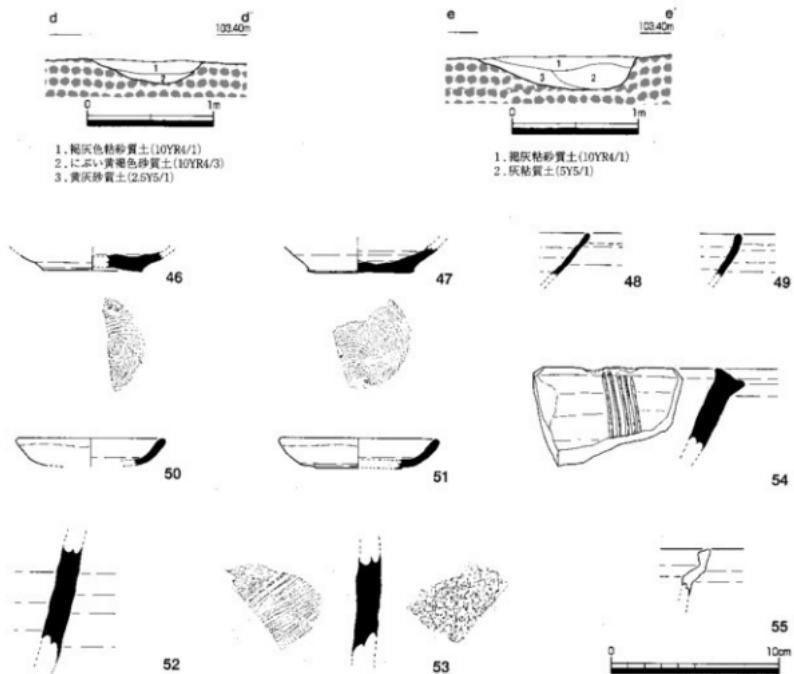
第37図 柱穴列 (1/80)



第38図 溝15～17断面図(1/40)・溝16出土遺物(1/3)



第39図 溝18断面図(1/40)・出土遺物(1/3)



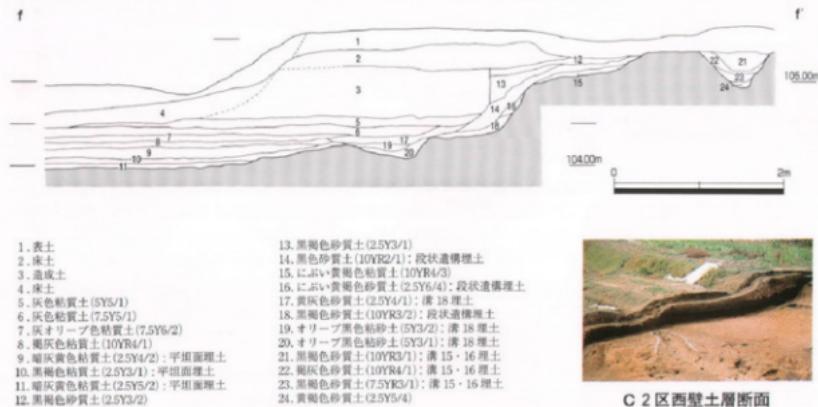
第40図 溝19断面図(1/40)・出土遺物(1/3)

端で溝15を切っている。検出できた範囲で長さ8m、幅70cm、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色砂質土層が堆積していた。遺物は少ないが、勝間田焼灰40、土師器鍋41、足42が出土している。遺構の時期は出土土器から12世紀～13世紀と考えられる。

溝17（第38図左）

C2区に位置する。堆積状況から平坦面の埋没後に掘削されている。東西方向に真っ直ぐに延び、検出できた範囲で長さ5m、幅80cm～1.2m、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色砂質土が堆積していた。出土遺物はないが、埋土や検出状況から13世紀～14世紀と考えられる。

溝18（第39図）



第41図 C2区段状遺構・平坦面断面図(1/60)

C2区に位置する。堆積状況から平坦面の埋没後に掘削されている。南北方向に伸び、溝の長さ5m、幅60m、深さ20cmを測る。埋土は黄褐色砂質土層が堆積していた。遺物は非常に少ないが勝間田焼碗43・44、青磁碗45が出土している。遺構の時期は、出土土器や埋土から13世紀～14世紀と考えられる。

溝19（第40図）

C3区に位置する。表土直下で検出されることから、予め平坦に造成された後に掘削されたものである。南北方向に10m伸び、西に直角に折れてさらに2m伸びる。幅は1.2m前後、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色砂質土が堆積していた。遺物は勝間田焼、備前焼、瓦質土器が出土している。勝間田焼では46～49の椀、50・51の小皿、52の壺、53の甕がある。54は備前焼すり鉢、55は瓦質鍋である。

のことから時期は近世と考えられる。

段状遺構（第41図）

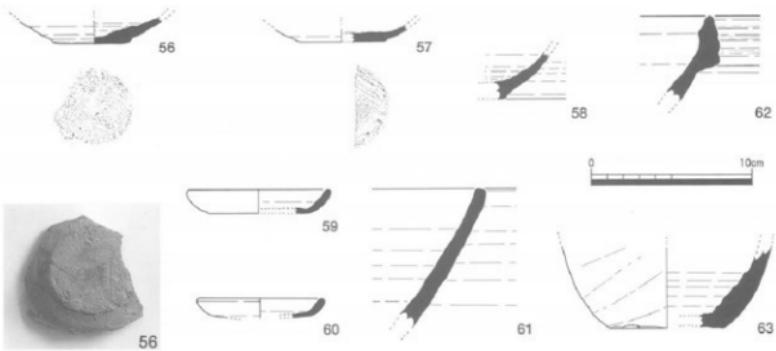
C2区、造成された水田の埋土（第41図の3層）を除去中、僅かに調査区西半分で黒色砂質土（同図14層）が堆積する落ち込みが検出されたため何らかの遺構と判断した。平坦面の規模は現状で南北に1m、東西3mである。これは東半分が削平を受けているため、南側は平坦面や溝17により切られているために残りが悪い。深さについては1mと急に下がる。埋土は黒色砂質土である。遺物は出土していないため詳細な時期は不明である。埋土等から弥生時代もしくは古墳時代の可能性がある。

平坦面（第41図）

C2区に位置する。地山を削り平坦面を作りだしたと考えられる遺構である。現状で南北長6m、東西長6mを測るが、西にはさらに伸びていると思われる。埋没後、溝17や溝18に切られている。埋土は茶褐色砂質土、黒褐色土が堆積している。地山面は水平でなくやや波打つようになっている。耕作痕の可能性がある。遺物はほとんど出土していないため詳細な時期は不明であるが、埋土等から時期は12～13世紀と考えられる。

その他の出土遺物（第42図）

主にC2区、C3区から出土している。量は多くないが、勝間田焼、備前焼、瓦質土器がある。その他、須恵器等も出土している。勝間田焼では56～58の楕、59・60の小皿、61の捏鉢がある。56の底部には墨書きがあるが、不鮮明で文字は判読できない。備前焼では62のすり鉢、63の壺がある。



第42図 C区 その他の出土遺物(1/3)

第5章 まとめ

勝央町福吉地区における圃場整備に伴っての限られた範囲の調査であったが多くの成果がえられた。以下では今回試掘調査を実施した荒神谷散布地、本発掘調査を実施した若王寺遺跡の成果についてまとめてこととする。

まず、荒神谷散布地については試掘調査のみであったが新しい知見が得られた。平野部から北西に延びるおおきな谷筋にあたり、調査の結果、弥生時代中期の包含層の他、平安～鎌倉時代の土壌、近世墓等の遺構が発見された。T 1 の弥生時代中期の包含層は、すぐ北東から伸びてくる尾根上の散布地に關係すると思われ、弥生時代の集落が存在することを裏付けるものである。ここより平野に程近く広い尾根上にある国司散布地と合わせて、付近一帯の丘陵に弥生時代の集落が展開すると考えられる。平安～鎌倉時代は、おそらく弥生時代と同じ尾根上が集落域と考えられるが土器の散布量も多く広範囲なことから、丘陵を中心に集落が存在すると考えられる。

次に、若王寺遺跡については、本調査を実施し、弥生時代～江戸時代までの複合遺跡であることがわかった。丘陵裾の緩斜面という好立地でもあり、集落域として断続的に利用されたようである。すぐ南には小河川の射川が西流し、低位部一帯は豊かな水田地帯として土地利用されたものと考えられる。以下では時代ごとに遺跡の様子を概観し、特に遺構の多い平安末～鎌倉時代についてやや詳しく検討してみたい。

まず若王寺遺跡において一番古い遺構は弥生時代のものである。試掘調査における T 1 の土壌や B 区で住居跡が確認されているが、中世以降の削平が著しいため、本来はより多くの遺構があったものと思われるが実態は不明である。T 1 土壌からは少量ながら弥生土器片が出土し、弥生時代中期頃と考えられる。包含層中からは形のわかる弥生土器はほとんど出土せず、わずかな破片と打製石包丁 1 点のみが発見されている。

つづく古墳時代では、唯一確実なものに溝 10 が確認されている。ここからは須恵器の甕が出土している。やや特徴的な形態であるが時期は古墳中期のものと考えられる。さらに古墳時代後期には遺構は未発見ながら、杯身・杯蓋・壺等の破片が包含層中から出土している。C 区柱穴列としたものは時期不明であるが、古墳時代の遺構の可能性がある。ちなみに若王寺遺跡から東へ 100 m、平野より奥まった位置に 6 世紀末～7 世紀にかけての製鉄関連集落と考えられている福吉丸山遺跡が確認されており関連性が伺える（註 1）。

古代末～中世を中心とする時期は遺構・遺物が豊富であり、この時期が集落の最盛期であったと考えられる。遺構も、掘立柱建物を中心に土壌、溝が確認されている。包含層中には比較的多くの遺物が出土しているが遺構に伴う遺物が非常に少ない。そのため、ここでは古代末～中世を一括して考えることとする。もちろん、遺構の切りあいや遺構埋土から幾つかに時期区分されると考えている。まず検出された遺構については、調査区全体では掘立柱建物が 9 棟確認された。大半は建物の主軸が北西方向に振る。最大規模のものは掘立柱建物 1 で、2 間 × 3 間、床面積 27 m² を測り、総柱構造をもつことから、主屋であると考えられる。西側には櫛が確認され、建物を囲っていたと考えられる。西側には掘立柱建物 1 と併存したと考えられる掘立柱建物 4 があり、2 間 × 2 間、床面積 9 m² を測る。性格としては納屋等の小規模建物と考えられる。切りあい関係から、掘立柱建物

2は掘立柱建物1に前後する時期であり、また掘立柱建物5・6なども掘立柱建物4に前後して存在したと考えられる。また、B区では掘立柱建物8のみ確認されている。柱穴は多く存在したが、調査区が狭いため建物としてまとめるのは困難であった。溝12・13のような逆L字形の溝は、削平を受けているが、形状から掘立柱建物を囲う溝の可能性が考えられ、高所に掘立柱建物が集中する可能性もある。C区においては掘立柱建物9のみが確認された。東南に地山が下がる地形からもほぼ集落域の東端と考えて良さそうである。これらのことから、屋敷地として利用された範囲はA1～2区、B区全体、C1区を結んだ一段高くなっている台地上と考えられる。限られた台地の中で幾つかの屋敷地が存在したと考えられるが、A区、B区とさらに試掘T1～3で柱穴等の密度が高く、掘立柱建物1以上の規模をもつ掘立柱建物が存在する可能性は高い。その他、掘立柱建物以外にはA3区で検出した不明遺構がある。機能は推測し難いが、土壙から溝が分岐していることや、並行する2本の溝7・8が取り付くと思われ、灌漑に伴う水溜め施設であったと考えられる。またB区の溝11は幅2mとやや規模が大きい溝である。試掘時のT3で検出した溝に続く可能性があり、これらは地形に並行して田畠を区画する水路の機能を持つと考えられる。その他、C1区には形状の似た溝15・16が前後して掘削されている。深さもあり集落内の排水用の溝と考えられる。C2区の溝17・18も同様の排水機能を持つと考えられる。平坦面とした遺構は、地山を平坦に掘削したもので屋敷地に隣接する畠地として利用された可能性が考えられる。

調査区全体からは破片ながら多くの出土遺物が認められた。主な出土遺物としては、勝間田焼椀・小皿・壺・甕、土師器鍋、瓦質羽釜・鍋があり、少量ながら青磁、白磁が出土している。勝間田焼椀の底部に墨書の見られるものも確認された。変わったものでは墓石が発見されている。その他鉄滓が多く認められるのも特徴的で、鍛冶遺構の存在が推定される。勝間田焼は平安末～鎌倉時代に本町勝間田一帯の窯で焼かれた須恵器系の焼物である（註2）。若王寺遺跡では出土量が多く、供膳具の大半を占めていると考えられる。

つづく近世以降には、A区溝1～3やC区溝19等がある。溝1～3はほぼ同じ場所に掘り直しされたもので、溝2、溝19等からは備前焼等が少量認められる。これらの溝はおそらく灌漑用の水路として機能していたようで、近世以降、付近は水田化し、これらの溝は現在の畦溝に踏襲されている。

以上、時代ごとにまとめをおこない、断片的ながら若王寺遺跡の集落像を推定することができた。特に中心時期である古代末から中世の集落遺跡は町内でも初の調査事例であり、より具体的な資料を提供している。勝間田焼の生産地として窯資料は比較的多い反面、消費の場である地元集落における様相は依然不明な点が多い。今後、集落遺跡の調査が進み、勝間田焼の消費状況等の成果等を蓄積し比較検討を行うことで、より鮮明に町の歴史を描くことが可能になると思われる。

註

- (1) 勝央町教委「福吉丸山遺跡」「勝央町文化財調査報告」第4集 1999
- (2) 勝間田焼全般については以下に詳しい。

伊藤晃「第十一章二節中世窯業生産」「岡山県の考古学」吉川弘文館 1987



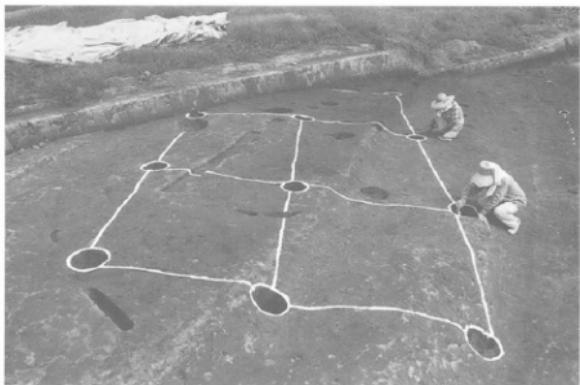
福吉地区全景（東上空から）



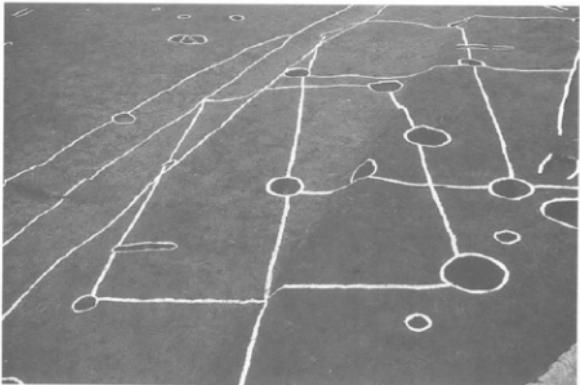
若王寺遺跡全景（西上空から）



A区全景
(北から)

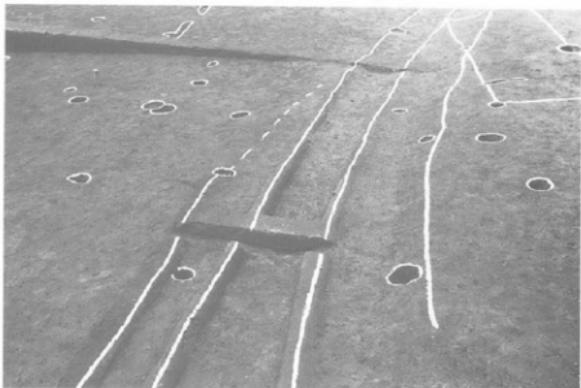


掘立柱建物 1
(北から)

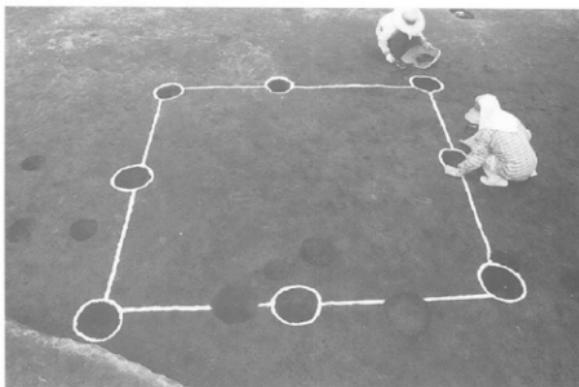


掘立柱建物 2
(南から)

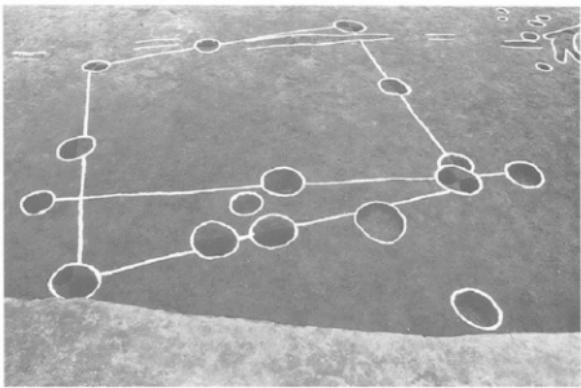
図版 2



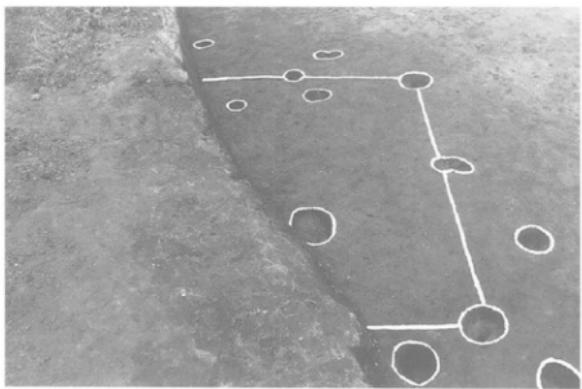
掘立柱建物 3
(南から)



掘立柱建物 4
(西から)



掘立柱建物 5
(西から)



掘立柱建物 7
(西から)

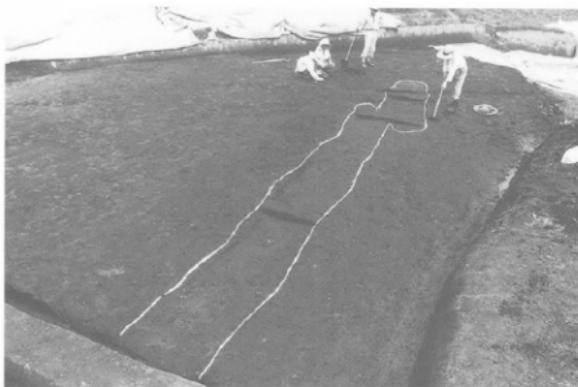


不明遺構
(西から)



溝 1~3
(東から)

図版 4



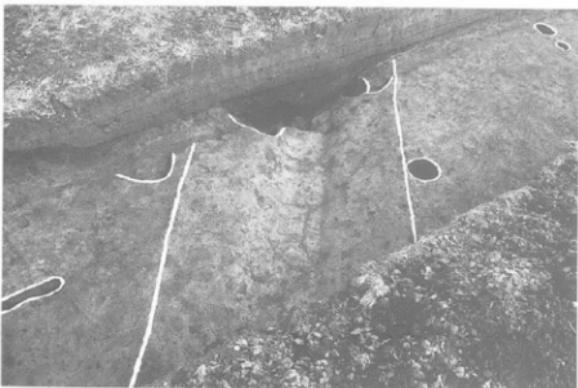
住居 1
(北から)



据立柱建物 8
(南から)



溝11・土壤 3
(西から)



図版 6



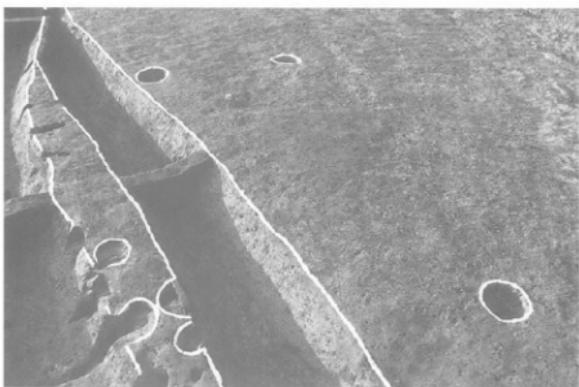
溝12~14
(東から)



素振り溝群
(西から)



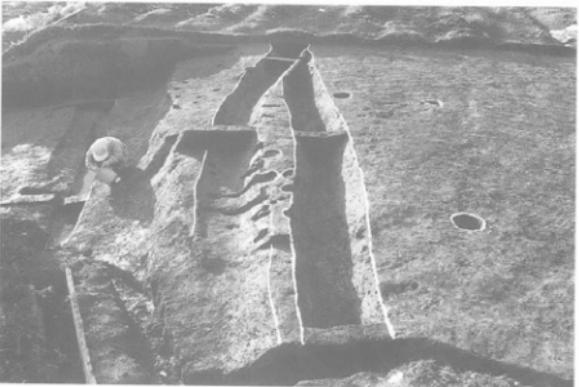
C区全景
(北から)



掘立柱建物 9
(東から)



柱穴列
(南から)



溝15~16
(東から)

図版 8



平坦面・溝17、18
(東から)



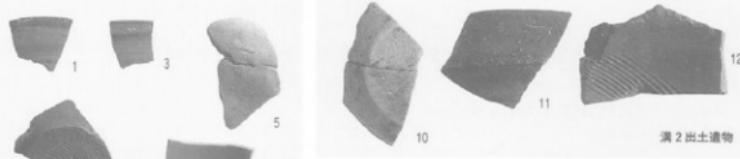
溝19
(北から)



現地説明会風景

図版9

A区



5

溝2出土遺物



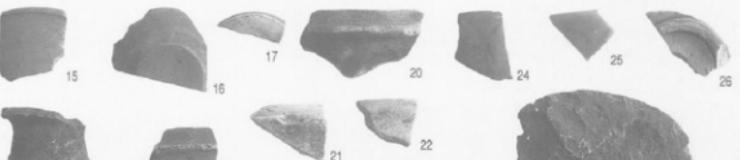
4

溝10出土遺物



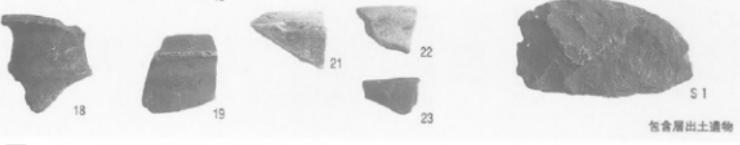
7

溝10出土遺物



15

S 1



18

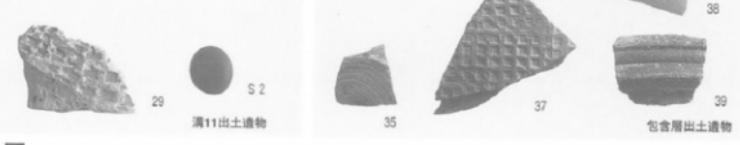
包含層出土遺物

B区



27

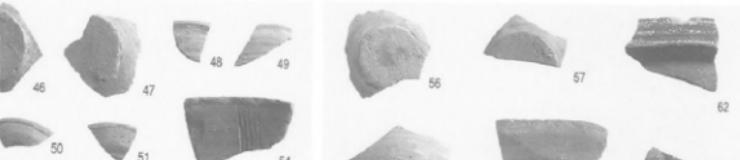
38



29

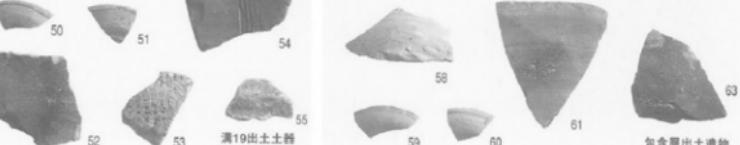
39

C区



46

52



50

63



52

包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	にやくおうじいせき							
書名	若王寺遺跡							
シリーズ名	勝央町文化財調査報告							
シリーズ番号	6							
編著者名	園正雄							
編集機関	勝央町教育委員会							
所在地	〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田201							
発行年月日	2004年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²		
所 在 地	市町村 遺跡番号	。	。	。				
にやくおうじいせき 若王寺遺跡	おかやまけんかつたべん 岡山県勝田郡 しょうおうちょう 勝央町 ふくよしあざひにやくおうじ 福吉字若王寺	33622	35 02 22	134 05 40	20000612 ~ 20000810 20001017 ~ 20001208	1000	福吉地区 土地改良事業	
所 取 遺 跡	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物			特 記 事 項	
若王寺遺跡	集落跡	弥生時代	住居跡	1軒	弥生土器、須恵器、鉄滓、 勝間田焼、土師器、備前焼、 青磁、白磁、石器、ほか			
			溝	1基				
			柱列	1基				
		古墳時代	建物 溝 土壙 平坦面	9棟 17条 2基 1基				
		中世～近世	建物 柱列 溝 土壙 平坦面	9棟 1基 17条 2基 1基				

印刷データ

紙 質 表 紙=ハイマッキンレーマットアート220K
本 文=サテン金墨 110K
写真団版=サテン金墨 110K

文 字 モリサワ書体 13Q・明朝・正体

本文図面 Macintosh

写 真 カラ=4色分解
本文写真=カラースキャナー 175線
写真団版=モノクロスキャナー 175線

勝央町文化財調査報告 6

若王寺遺跡

-福吉地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査-

2004年3月29日発行

編集・発行 勝央町教育委員会
〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田200-1
TEL (0868-38-3111)

印 刷 株式会社 津山朝日新聞社
〒708-0052 岡山県津山市田町13
TEL (0868-22-3135)



A区調査屋景(北から)